

藍の国にっぼん！琉球藍復活プロジェクト～久米島編～

琉球藍復活プロジェクト

プロジェクトチームの目的	自然豊かな久米島の強みをいかし、地域活性化を実現する		
解決したい課題	琉球藍枯渇、島内外の人との交流、人口減少（特に若者）		
関連するゴール	4、8、9、11、12、13、 14、15、17	活動期間	令和6年3月～7年4月
1年間の活動概要	1年間の活動成果		活動時の写真や画像等
当初2人でスタートしたプロジェクトは久米島高校園芸科や久米島町内外の方々の賛同を得ながら取り組むことができた。特に6月に横浜で開催した横浜市都市整備局万博推進課の後援のシンポジウムがきっかけで埼玉、神奈川の高校と藍栽培や収穫体験などの連携し、3校をオンラインで繋げた。宮古上布染織工房からも琉球藍の苗をいただくなど、重要無形文化財を守る共通の課題解決に向けた交流がきっかけとなり、島外ボランティアが来年度に向けて神奈川県茅ヶ崎市で琉球藍の栽培準備も始めている。	活動を通して、琉球伝統染織品の魅力を島内外の人に伝えると共に、琉球藍栽培を通じて海を超えた交流に繋げることが出来た。実際に琉球藍が増えていることや興味を持った方が久米島を訪れるなどが活動成果である。		活動時の写真や画像等

今後の展望

島内外の観光施設などとの連携により、栽培だけでなく、産業になるまでの藍建手にも取り組んでいきたい。



久米島高で琉球藍育成 久米島紬の染料

【久米島】久米島高校園芸科は4月から、課題研究の授業の一環で、琉球藍を育てる取り組みを始めている。琉球藍は、琉球絣など沖縄の染め織りに欠かせない染料で、久米島の伝統的な織物「久米島紬」にも、しばしば用いられる。久米島高園芸科教諭の知念邦睦さんは「まずは親株の役割ができるようになるまで育て、久米島の家々に配り、島で安定して藍を育てられるようにしたい」と話す。

まず7株「島全体に増やす」

久米島では、久米島紬で使う染料のほとんどを、島に自生する植物でまかなう。一方、琉球藍は、使用量が少ないことから、本部町伊豆味から購入している。久米島高では、藍を育てることで、島の伝統工芸への生徒の関心が高まることにも期待する。

久米島高での琉球藍育成は、久米島紬大使で、昨年度に「久米島紬後継者育成事業研修」も修了した沖眞由美さんの声かけで始まった。沖さんは「琉球藍も島で育てられないか」と考え、本部町伊豆味や宮古島の琉球藍製造所を訪ね、自らの思いを伝えた。製造所は「活動を応援し



久米島高校園芸科が育てている琉球藍

たい」と無償で琉球藍を提供し、沖さんに共感した久米島高で育



琉球藍の育成に取り組む（左から）久米島高園芸科の知念邦睦教諭、同3年の野村珀さん、大城蕉真さん、久米島紬大使で織子の沖眞由美さん＝5月15日、久米島高校

成が決まった。

久米島紬事業協同組合の松元徹理事長は「沖さんはライフワークとして、久米島紬に魅力を感じてくれている。いろいろな立場の人たちが久米島紬を発信してくれることを、大いに歓迎したい」と活動を見守る。

久米島高で育てる琉球藍は本部町伊豆味からもらった1株

と、宮古からもらった6株の計7株。

久米島高園芸科3年の野村珀さん(17)＝兼城＝は「日に弱いため、直射日光と乾燥に気をつけて、大きく育てたい」と意気込む。同3年の大城蕉真さん(17)＝西銘＝は「ここから増やし、島全体で育てていきたい」と話した。

(藤村謙吾)